

海洋と地球のことなら

—国立研究開発法人海洋研究開発機構 (JAMSTEC) 横浜研究所図書館—

小川 真理子

JAMSTEC横浜研究所と言えば、スーパーコンピュータ「地球シミュレータ」を駆使して地球温暖化や地球内部の動きなど、地球科学に関する最先端の研究を行っているところ、その専門図書館を訪問するというので、かなり身構えてJR根岸線・新杉田の駅を出た。歩くこと十数分、JAMSTECというロゴをつけたビルが現れた。門をくぐるとすぐ前のガラス張りの建物が「地球情報館」で、機構で研究したり観測したりしたデータを一般向けに開放している場所だ。その2、3階に図書館が併設されている。

海洋・地球情報の発信基地

「地球情報館」に入ったところの映像展示室には、正面に大きなメインスクリーン、その前に直径3mほどの半球型のスクリーンがある。パネルを自由に操作して、地球や海に関する情報をスクリーンに映し出して見ることができるし、半球スクリーンには宇宙から見える映像、雲の動きや海面の動きなどが映し出される。ダイナミックな動きをしていることを実感した。そのほか、アニメーションシアター、4Kシアターもあり、楽しく学ぶことができるようになっている。シアターの上はギャラリーで、その時々企画展示を見ることができる。面白いものがいっぱいあり、一日ここで過ごすのも退屈することはなさそうだ。さて、それでは2階にあがり、図書館を見てみよう。

2階図書館（一般の方向けの図書室）

「え、これが研究所の図書室？」と入ってびっくり。深海生物のペーパークラフトやぬいぐるみが出迎えてくれた。そしてすぐ目につくのは、何かの展示物。実はここは普段は平日のみの開館だが、毎月第3土曜日は公開セミナーがあり、その日は開館している。午後の公開セミナーでは研究者による講演があり、午前は子ども向けのイベントなども行っている。それに合わせて、図書館ではそ

の日のテーマに関連する本を「JAMSTEC Library Communication」という図書通信で紹介し、紹介した本を入館した時に目につきやすい場所に展示しているのだ。その本も、児童書など内容の易しい本、一般書、専門書と分けて展示し、誰もが満足して学べるように工夫されている。本以外にもテーマに関する実物を展示している。そこは、研究所に併設されている図書館の強みだろう。今回は「海底観測から新種の地震の謎に迫る」というテーマで、展示されていたのは、南海トラフ海底の地震津波観測監視システム (DONET) で実際に使われているケーブルと地震計だった。地震計のそばで動くパソコン上に計測された揺れが表示されるようになっていた。実物の展示で科学を身近に感じ、更に本を読んで深く理解する、という仕組みだ。

開架室はそれほど大きくないが、一角がJAMSTECの関連本コーナーになっており、JAMSTECが作成出版した報告書類、研究者の著書、JAMSTECが紹介された図書などが置いてある。公開セミナーのDVDもあり、過去のセミナーを視聴できるようになっている。DVDはそれ以外にも科学に関するものが揃っていて、館内で見ることができる。

中央の本棚は海洋や地球科学の一般書で、日本十進分類表の400番台を中心に、500番台、600番台も所蔵している。物語系はないのかというと、さほど多くはないが、海洋科学に関するフィクションなどを集め、所蔵している。本の貸し出しは一部を除き、3冊まで、期間は一か月だ。

壁沿いの低書架と面出し書架は、児童書のコーナーになっており、明るい表紙が目飛び込んでくる。一般の図書館では禁帯出となっている図鑑類や、壊れやすいために館内閲覧のみに利用が制限されることも少なくない仕掛け絵本などここでは貸し出し可能だ。一般の図書館に比べて利用者がそれほど多くないからこそできるサービスだ



ろう。そしてここにも、深海の環境について説明する展示があった。深海では水圧が高くなるので物が押し潰されてしまう。そのような高圧の環境を再現する実験装置があるそうで、子どもたちの前で装置に発泡スチロールのコップを入れ、レバーを上下させて高圧にしていくと、どんどんコップが小さく縮んでいってしまう過程を見ることができる。高圧をかける前とかけた後のコップも展示され、手に取ることもできる。縮んだコップは普通のものとは確かに手触りが違っていた。

この図書館の来館者としては、近隣の方はもちろん多いが、そのほかに「深海生物大好き！」という子どもたちが遠方から訪ねてくれることもしばしばだという。子どもたちはお土産に、私が最初に目にした深海生物や調査船のペーパークラフトを貰えるそうだ。まさに海好きの子どもたちにとって魅力満載の図書館と言えるだろう。

研究者向け図書館

肝心の、研究者向け資料はどうなっているのだろう。職員用の書架は2階の奥と3階にあり、職員は24時間いつでもカードで入室して本や雑誌を手に取り、借り出せる。雑誌架はかなり空いているように見えたが、これは今では学術雑誌のほとんどが電子化されてペーパーレスになっているからだそうだ。また、電子ブックを多数所蔵しており、図書館に足を運ぶことなく、研究室でパソコンで読むことができる。JAMSTECの場合は特に、研

究者によっては海洋上や海外で長期間研究を続けなくてはならない人も、電子資料であればインターネットがつながる環境であれば利用が可能である。今では必須のものなのだろう。

冊子体の図書は、JAMSTEC全体で約6万冊（そのうち一般開放図書館に約6000冊）、冊子体の雑誌はバックナンバー含めて約2500タイトル所蔵している。そのほかに横須賀本部図書室、むつ研究所、高知コア研究所、沖縄にもそれぞれ図書がある。居室のパソコンから予約を入れれば、図書館に来なくても、所内便で手元に届く仕組みになっており、研究者は他のことに煩わされずに研究に専念できるようだ。

一般の人向けにも研究者向けにも、サービスの質の高さを感じた図書館訪問だった。

（おがわ まりこ：科学読物研究会）

<利用案内>

所在地：〒236-0001 神奈川県横浜市金沢区昭和町3173番25 電話045-778-5476

開館時間：10:00 - 17:00

（地球情報館を開館する第3土曜日 10:00 - 16:00）

休館日：日曜日・祝祭日、

地球情報館を閉館する土曜日

HP <http://www.jamstec.go.jp/j/pr/library/>
蔵書検索（外部から検索できます）

<http://www.jamstec.go.jp/opac/mylimedio/search/search-input.do>

ちいさないのちとあゆむ

—『見えない蝶をさがして』—

三沢 秀次

いせひでこ（伊勢英子）、と聞いて思い浮かべる本はなんだろうか。母娘のものがたり『マキちゃんのえにつき』や『グレイがまってるから』のハスキー犬の3部作だろうか。画家・芸術家をたどる『カザルスへの旅』『ふたりのゴッホ』か。宮沢賢治作の『よだかの星』『水仙月の四日』か、長田弘作の『最初の質問』『幼い子は微笑む』だろうか。それとも、『1000の風 1000のチェロ』『絵描き』『にいさん』『ルリユールおじさん』『大きな木のような人』『あゝの路』『チェロの木』『木のあかちゃんズ』『ねえ、してる？』が思い浮かぶのだろうか。

いろいろな本や絵本があると思うのだが、原画展などでお会いする方々におはなしをうかがうと、それぞれの方がご自身の愛読するこの一冊をお持ちのようだ。

自分で見たこと、体験・取材したことを画にし、本にし、文にしてきた画家・絵本作家は、けっして多作ではないが、大切にしてきたこと、興味をもって見たことを見つめつけ、作品にしているように思う。

『見えない蝶をさがして』は、長野県松本市に本部をおく^{たけ}岳俳句会の月刊誌『岳』の表紙画で構成した本だ。主宰の宮坂静生さんの『えほんのような表紙絵でいいのですよ』という言葉で、2009年から半年に1枚ずつ描き続け、ちょうど10年になる。本には19枚の作品を掲載した。それぞれの画には、森や木、花や穂、精霊、あかちゃん、子どもたちなどが描かれている。絵の1点1点に掌篇（ことば、エッセイ）を添えた。

2009年、最初の画は「大きな木のような人」と題した、樹齢250年のプラタナス。この画に「うまれて まだ 250年め」ということばを添えた。2011年3月11日には東日本大震災が起きた。その年の後半の画は「クヌギのあかちゃん」と題し

た、青葉や枯れ葉、どんぐりのついた枝を、どんぐり頭の木のあかちゃんが元気に動く画だ。震災と原発事故のあと、絵筆がとれなかった時期、いまを生きる幼子の未来やその場を動けない木草や虫・鳥・動物たちを想い、できることは何と考えて刊行したのが『木のあかちゃんズ』だった。その年、宮城県の亘理吉田浜で、津波で根こそぎ流



『見えない蝶をさがして』／いせひでこ著／B5変型 上製本 52頁
／定価：本体1600円（税別）／
平凡社 2018年5月刊

され、横たわったクロマツに出会う。旅する絵描きの常としてのスケッチがその時はできず、スケッチまで2年を要した。木の朽ちるのを見つづけ、植樹の地にチップとなって撒かれるのも見とどけた。一方、流された木々が、家を壊し、命をうばったことも知る。木を想うこと、人を想うこと、命を想うこと、……「水仙月」「ひかりの子ども」と題した画には、静かな祈りや託した希望とも思える感情が見えてくるようだ。

もちろん、旅する絵描きはふたたび絵筆をにぎりはじめた。こんどはいろいろな時間を画にこめはじめる。木陰で眠りながら本を読んでいる老師の「陽だまり」、落葉広葉樹の森で読書をする「緑陰の部屋」、苔むすカエデの切り株で妖精がチェロを奏でる「森の歌」、春をつげるヤドリギをかついだ精霊が雪の森に向かってあゆむ「春の路」など。

「ヤドリギ」では指数関数を発見した子どもの話を添えた。「46億年の時計」では1枚1枚地層をはいでいくと、どんなものに出会うのだろうか、といった、旺盛な興味のきらめきを感じる画と文をあわせている。台湾旅行で行った「蝶の谷」。最初は何千何万のマダラチョウに出合ったが、再訪時は叶わず、見えない蝶が見えるまで旅はつづくこと結ぶ。

やわらかく、あわく、動く、しなやかな画と文を楽しんでいただけると幸いです。

（みさわ しゅうじ：平凡社）

旅先での本屋さんとの出会い

—奈良のえほんやさん—

溝上 牧子

去年の12月、友人に誘われて奈良にある春日大社の御祭りに行ってきた。一昨年も出かけたので2回目である。昔から続く神事は興味深く奥が深い。歴史の一部に、同席させていただいていると思うと身も引き締まる思いがする。今回友人が予約してくれたホテルは奈良公園にも、春日大社にも近く、夜中の行事に参加するのにぴったりの場所。

ならまちにも近いホテルのまわりを散策していると、ホテルのある道の向かい側に絵本を売るお店を発見した。すでに閉まっていて、暗くなったお店を覗くが看板も出ていない。気になるので滞在中に覗きに行くことにする。

さっそく部屋で「ホテル名+近所」、「絵本屋」と検索をかけてみると、おお、出てきた！ 新本を扱う絵本屋さんだ。会社では書店の住所管理を同僚がやっているのかまけて、私は地方の書店の情報ほとんど知らない。勿論奈良のこの書店のことも知らなかった。営業時間を見ると月・水はお休みで他の曜日は9:30～17:00までとある。微妙な時間帯。目的が町歩きではないので、遠方への観光のあとに時間が残るか微妙なところだ。奈良にいる土・日・月のうち月曜日が休みなので日曜日、柳生の里から戻ったら覗きに行こうと決めた。

しかし旅にはハプニングがつきもので、予定はずれにずれて戻ってこられたのが16時40分頃。奈良公園近くのバス停から早足で向かい、友人は酒屋の春鹿へ、私は書店に向かった。閉店間際の16時50分ごろ店の前に到着するも、どうやらお掃除中。入っていいものか迷ったが、取りあえず店の中へ。私が「中を見てもいいですか？」と言うと「どうぞどうぞ」と入れてくれた。「いつもこんななんですよ。気にせず見てください。床が汚れてたんで雑巾がけをしてたんです」と店の人。客は私一人だったので、普段プライベートなときにはあまり素性を明かさないのだが、旅先ということで開放的な気分も手伝って話しかけてみた。

「実は出版社の者なんです。道を歩いていたらすてきな本屋さんがあったので気になって覗きにきました。お店の名前がわからなかったんだけど、うまく検索できてお店の名前と営業時間がわかったのです」。

すると店の人は「看板もつけてないんで、よく検索できましたね！ みなさんになかなかヒットしないっていわれるんです。みんなが絵本屋さん絵本屋さんって言うので、えほんのおみせって名前にしてて」(本当はその前にアンジュールが付く)「朔北社って知っていますか？ 私はそのものです」。店の人(少し考えこむ)。私「売れている本では『どうぶつにふくをきせてはいけません』とか…」。店の人「あ、ミートボール描いた人と同じ人ですよね!」。私「そうです! そうです!」。店長「ミートボール(『くもりときどきミートボール』ほるぷ出版)今は手に入らないみたいですね」。

そしてしばしおしゃべりという楽しいひとときを過ごす。しばらくして悲しいお知らせも…。店の人「実は、このお店12月いっぱいまで閉めることにしたんです」。私「えーっ、それは残念なお会いしたばかりなのに…」。まさか入ったお店が今月閉店なんて。

その後、お店をはじめたきっかけ、それまでのお客さんのこと、好きな本などなど順不同な私の質問にも嫌がらず答えてくださった。すてきな人だった。そんな人に「せっかく出会えたのに残念です…」と言っていたら、こちらこそだ…と思う。名刺も持っておらず、あんなに話をしたのに名前も聞かずに別れた。でも何かの縁に引き寄せられたような出会いだった。彼女はお店を閉じて海外に行くのだと言っていた。また会えるだろうか？ 後日ホームページには彼女がお客さんたちに向けた「お知らせ」がありその最後に「またいつか、どこかでお会いできることを楽しみにしています」とあった。彼女とはまたどこかで再会できるに違いない。(みぞかみ まきこ：朔北社)

図書館を離れて (第40回)

—「ちびくろさんぼ」のドーナツ 5: 時のながれとともに—

並木 せつ子

「岩波の子どもの本」以前の、歴代「ちびくろさんぼ」をじっくり読んで改めて気づいたのは、今は差別語とされる「くろんぼ(くろんぼう)」という言葉が、もれなく使われていることだった(「岩波の子どもの本」も1953年の初版で使われている)。当時は差別や差別語に対する認識が薄かったのだろう。1927年に「黒坊太郎」(中西芳朗著『発明美談』所収 コドモ芸術学園)と称する創作童話があった。黒坊には「くろんぼ」とルビがふってある。毎日浜辺にいたため日に焼けてまっ黒になってしまった黒坊太郎が、小人に案内され竜宮城へ。おみやげをもらって帰ってきて楽しく暮らすという筋である。このように、必ずしも人種に限定した使い方をしていただけではなかったが、差別という意味合いが無かったとは言いがたい。

たぶん昭和30年代だったろうか。題名も主人公の名まえも思い出せないが、こんな少女漫画を読んだような、おぼろげな記憶がある。主人公は黒人と日本人の混血の少女で、「くろんぼ」とからかわれて辛い思いをしながらもがんばって生きる、という筋だった。これは物語の中だけの話ではなく、現実にも同じような例がたくさんあったはずである。

「くろんぼ」という言葉は、歴代の「ちびくろさんぼ」の中でどのくらい使われてきたのだろうか。戦前は100%、すべての本で使われている。戦後(1945年)～1950年代になると、使用率は約69%まで下がるが、この言葉を使わない例が出てくるのは50年代も後半になってからのこと。つまり、1955年(昭和20年代)までは使用率100%だったということである。そして、60年代は約61%に減少し、70年代は約52%で半分に、80年代に入ると約18%になり比率は逆転する。時の流れとともに、差別語への認識は(差別そのものではない)深まっているということが見てとれる。

こうした認識は「ちびくろさんぼ」の絵にも、微妙に影響を与えているような気がした。時代を追って、複製した絵を並べて見ているうちに、サンボの

顔の描かれ方に傾向らしきものが見えてきたのである。絵は見る人により感覚も違うし、文章で表現するのは難しいが、私の感じた大まかな傾向を述べてみたい。

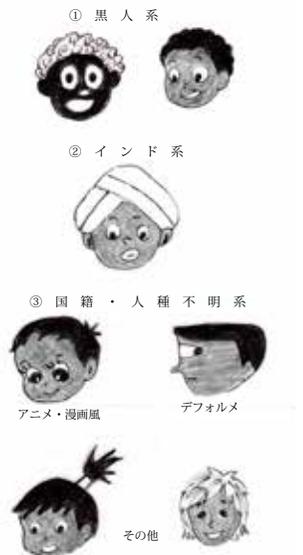
顔色は、どの本でも、黒または黒っぽい。顔立ちは、大雑把ながら黒人系、インド系、国籍・人種不明系の3種類に分類してみた。図は3種類の特徴がはっきりするよう、類型化して描いてみたものである(特定の本の絵ではない)。まず、①の黒人系だが、ドビアスの絵やだっ

こちゃん人形に代表されるものと、縮毛や厚い唇という特徴はあるがドビアスとは別系統の2種ある。

②のインド系は、頭にターバンをまいているもの。数は少ないがインドを意識したかと思われるものもあった。③の国籍・人種不明系は、デフォルメされていてわからないものと、アニメ・漫画風にかわいらしく描かれているものの2種あった。

年代順に見ていくと、戦前から1949年までは①の黒人系が75%、③の国籍・人種不明系が25%。

1950年代は①が64%、②のインド系が7%、③が29%。1960年代は①が61%、②が10%、③が29%。1970年代は①が33%、②が6%、③が61%。1980年代は①が15%、②が8%、③が77%という結果だった。要するに、1960年代まで多かった黒人系のサンボは、70年代から減りはじめ、80年代には少数派になったのである。その結果として、1970年代後半から国籍・人種不明系が増えた。とりわけ80年代はアニメ・漫画風がほとんど



で、見分けるのが難しいくらい同じような顔つきになってしまった。絵においても言葉と同様に、差別と受けとられるようなものを避ける風潮を見てとることができる。

両親の服装にも二つの傾向があった。これも大まかではあるが、一つはバンナーマンやドビアスが描いたような、帽子にパイプの父と、長いスカートと頭にスカーフを結んだ母というタイプ、もう一つは中東のようでもインドのようでもある民族衣装タイプである。これらが混在しながら時代は進むが、1980年代になると、父はターバン母はサリーという、

いかにもインドという衣装が増える。これも言葉や顔立ちと同様の配慮なのであろうか。

バンナーマンが自分の子どもたちのために絵本を作ってから約100年を経た頃、日本では「ちびくろさんぼ」が一斉に絶版になった。こんなにいろいろなサンボがいたかと思ったら、今度は急に絶版。その後10年ほどで再登場したら、名まえが変わったり、黒い犬になったり。サンボがこれほど波乱に満ちた生涯をおくるとは、バンナーマンも予想だにできなかったにちがいない。さぞや驚いていることだろう。(なみき せつこ:元図書館員)